

























西表自然休養林（宇多良遊歩道）案内図



宇多良炭坑の概要

西表炭坑は1886年（明治19年）から西表島の西部を中心に採炭がはじまり、第二次大戦終了後も米軍統治下で、数年採炭された長い歴史を持つ沖縄県内で唯一の炭坑である。宇多良は、明治・大正期の採炭や内戦後のあと、1936年（昭和11年）に島三炭坑宇多良採炭所として開坑された昭和期の西表における代表的な炭坑である。炭坑ではジャングルを切り開き炭夫の宿舎や集会所、食堂、売店などが設置され、炭夫など数百人が暮らしていた。しかし、太平洋戦争がはじまり、1943年（昭和18年）ごろから石炭の輸送が困難となって、事業停止に追い込まれた。炭坑が日本の近代化に果たした功績を記念し、宇多良の炭坑遺構も2007年に貴重な「日本近代化産業遺産群」の一つとして認定された。



林野庁 沖縄森林管理署
(資料提供：三木 健 氏・竹富町役場)



西表島の地形と石炭層



西表島は面積289.27km²、周囲129.99kmと沖縄県下では沖縄本島に次ぐ大きな島である。亜熱帯海洋性気候に属しており、雨影の影響で一年を通して気温の変化は小さく、湿度は年平均78%と高い。年平均2,200mmを超える降水量は、島のいたるところに大小の河川と多くの滝を形成し、沖縄県内最長の洞内川をはじめ、亜熱帯の森と水量豊かな河川を支えている。西表島は約1500万年前に海中から隆起した大陸の一部であり、第三紀中新世に堆積した八重山層群と呼ばれる砂岩や頁岩の地層から成っている。この地層の間に厚さ20cmから100cmの石炭層が3枚程度挟まれており、特に内羅無炭層と呼ばれる、仲良港周辺及び洞内川周辺に多い。石炭の地層としては比較的浅い場所にあることや、遠く大陸から海流に運ばれ海底に堆積した植物が元となったため、層が薄いのが特徴である。

 **林野庁 沖縄森林管理署**

(資料提供：三木 健 氏・竹富町役場)

丸三炭坑宇多良鉱業所の全景



1935年（昭和10年）に宇多良で炭層が発見され、翌年に丸三炭坑によって宇多良鉱業所がジャングルを切り開いて建設された。2階建ての坑夫独身寮、一戸建ての夫婦宿舍、300人収容の集会所兼芝居小屋、医務室や売店など、忽然と一つの炭坑村が出現した。当時の全景写真が残っているが、今では想像もつかない光景である。しかし、これらの施設は今では姿を消し、わずかにトロッコのレールを引き込んだレンガ柱の遺構などが残っているだけである。目の前のレンガの遺構を、当時の写真に照らし合わせ、宇多良炭坑の全景を想像してほしい。



林野庁 沖縄森林管理署（資料提供：三木 健 氏・竹富町役場）



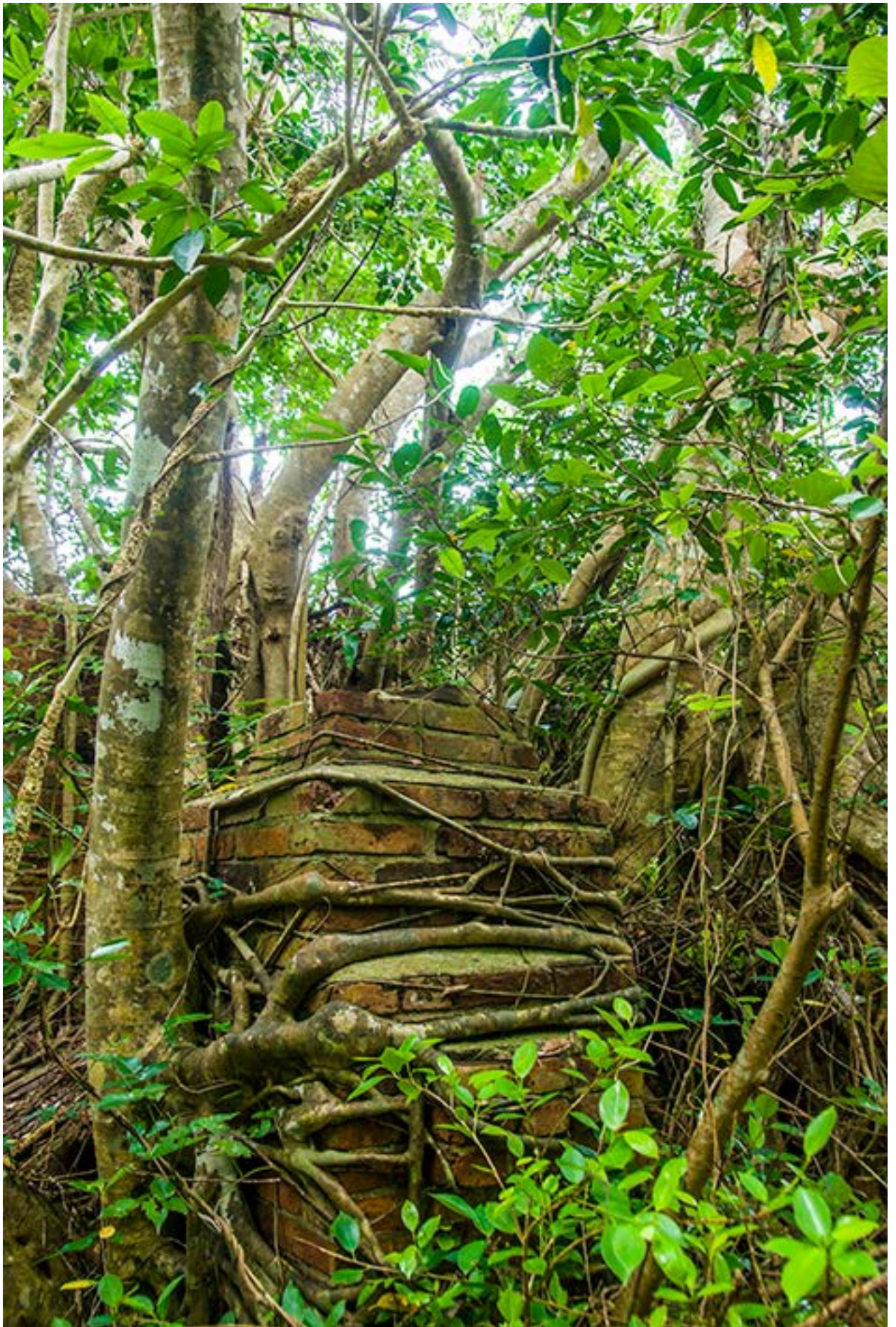










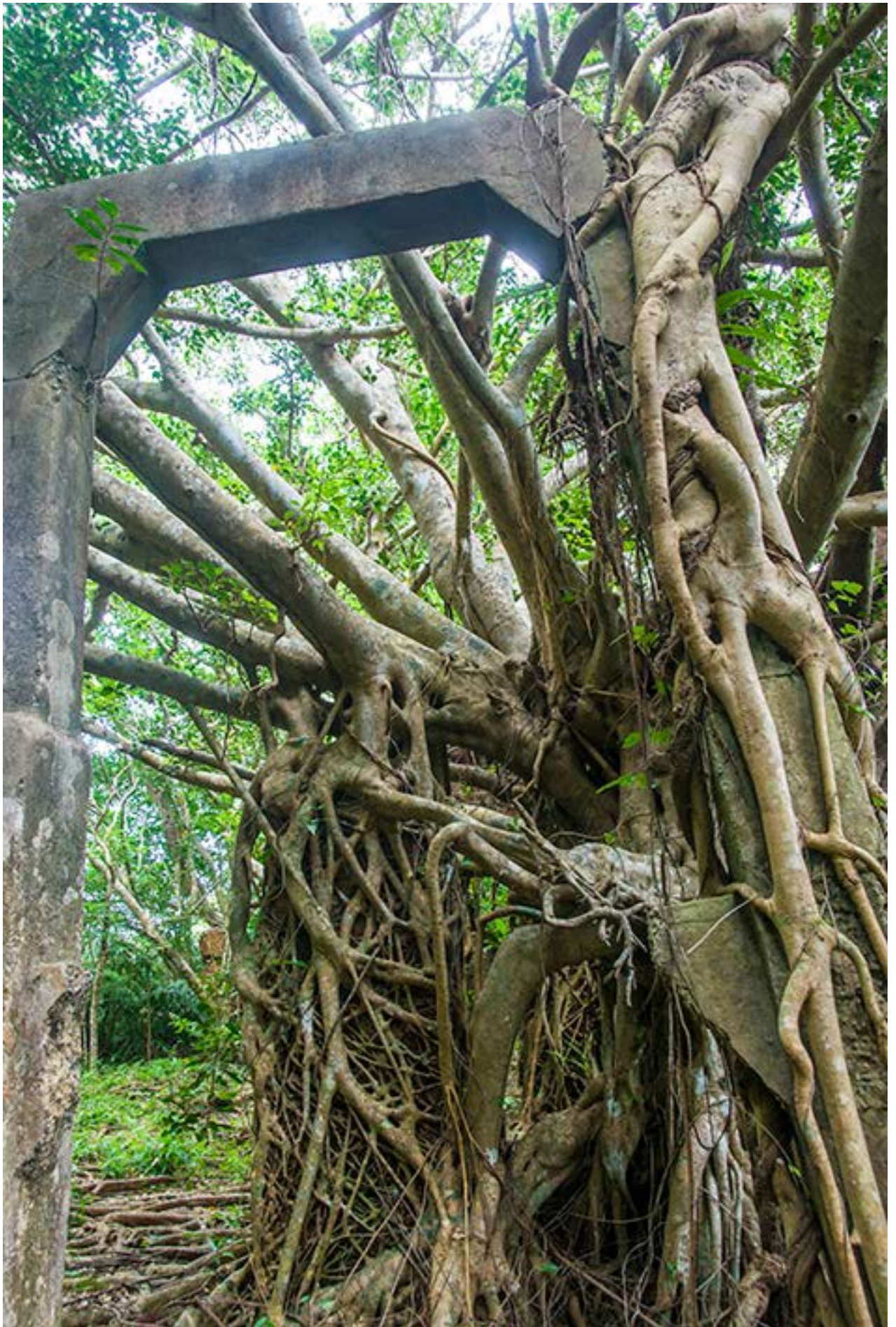


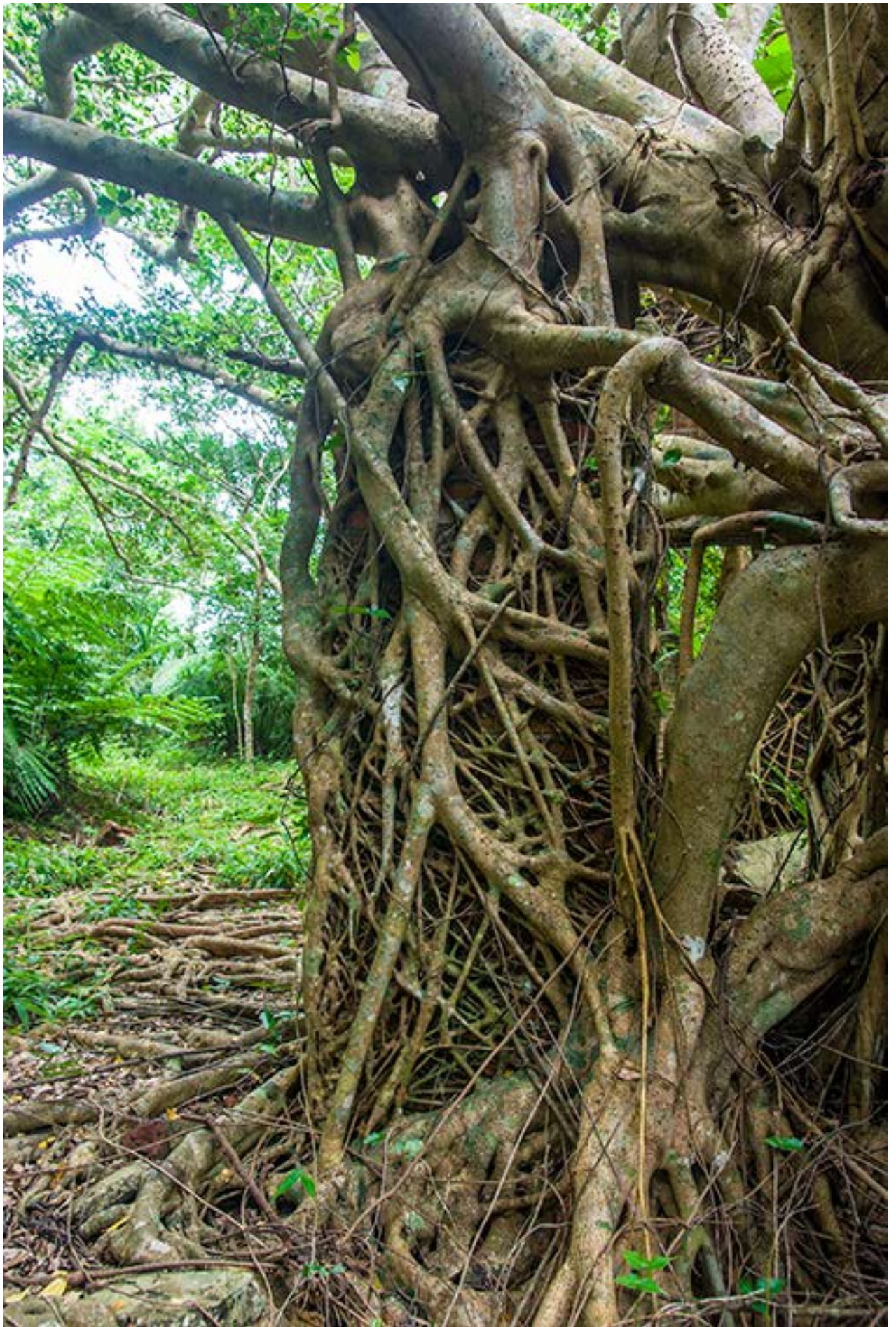






























炭坑の生活



炭坑での生活は、ほとんど炭坑村の中で営まれた。坑夫たちの多くは韓国人の口車にのせられ、九州などの産炭地から来ていた。台湾北部の産炭地から台湾人坑夫も来ていた。中には沖縄(本島)や宮古島から来た人もいた。坑夫たちは朝の5時に起床、6時に坑内に入って採掘し、夕方6時に上がった。給料は炭坑独特の「炭坑切符」と呼ばれた金券で支払われ、炭坑直営の売店から米、酒、しょう油などの日常物資を購入した。野菜などは地元の村人から購入していた。一帯はマラリアの有病地のため、常にマラリアとの戦いを余儀なくされた。



炭坑切符

 林野庁 沖縄森林管理署

(資料提供：三木 健 氏・竹富町役場)

貯炭場跡



貯炭場と突堤

宇多良坑の石炭埋蔵量は、480万トンと言われ、1938年（昭和13年）には月産2500トンを産出していた。採掘された石炭は、坑口から引かれたトロッコに積まれ、ここの貯炭場まで運ばれた。山積みされた石炭は、宇多良川に横付けされたダルマ船に積まれ、浦内川河口の本船まで運ばれた。積み込み作業は、川岸に突き出したコンクリートの突堤から下のダルマ船に落とされたが、当時の突堤の跡が今も残っている。貯炭場の跡には、石炭屑やボタが、戦後しばらくまで見られたが、今ではほとんど姿を消した。



林野庁 沖縄森林管理署

（資料提供：三木 健 氏・竹富町役場）

丸三炭坑宇多良鉱業所の全景



1935年（昭和10年）に宇多良で炭層が発見され、翌年に丸三炭坑によって宇多良鉱業所がジャングルを切り開いて建設された。2階建ての坑夫独身寮、一戸建ての夫婦宿舎、300人収容の集会所兼芝居小屋、医務室や売店など、いっせに忽然と一つの炭坑村が出現した。当時の全景写真が残っているが、今では想像もつかない光景である。しかし、これらの施設は今では姿を消し、わずかにトロッコのレールを引き込んだレンガ柱の遺構いこつなどが残っているだけである。目の前のレンガの遺構を、当時の写真に照らし合わせ、宇多良炭坑の全景を想像してほしい。



林野庁 沖縄森林管理署

（資料提供：三木 健 氏・竹富町役場）

炭坑労働の歴史



宇多良炭坑跡に残る炭坑関係者の墓

西表炭坑の坑夫の労働は、明治期に導入された納屋制度を基本としていた。同制度は坑主から請け負った納屋頭が、坑夫の労働や生活を管理するというもので、時に暴力を伴う強制労働で「**庄制炭坑**」として坑夫たちから恐れられ、逃亡が企てられた。しかし捕らえられると、厳しい拷問が待っていた。宇多良鉱業所では、こうした汚名を払拭すべく、近代的経営を目指したこともあったが、戦時下の増産体制の中で労働は強化され、再び元の「**庄制炭坑**」に戻った。犠牲となった坑夫たちの遺体が、墓石もなく周辺に埋められた。また、山中に逃げて道に迷い、白骨となった坑夫もいた。



林野庁 沖縄森林管理署

(資料提供：三木 健 氏・竹富町役場)



























































お知らせ

左記により豊年祭
大綱用つう取り作業を
実施致します

※多数の皆様の中協力をお願い致します

記

日時 六月三日(土)

午後一時

場所 美田良田原

平成二十六年六月十七日

各位様

祖継公民館長
古見代志人









